

自由論題 8「中国の政治と社会」・報告 2

報告テーマ

中ソ文化交流をめぐる中国の青年知識人の受容について

“The Adaptation of the young intellectuals on the cultural exchange between China and the Soviet Union”

氏名(所属)

鄭 成(早稲田大学)

要旨(800 字程度)

本報告は、中国政府主導の中ソ文化交流が知識人の意識転換に与えた影響を考察し、建国初期のイデオロギー宣伝に対する民衆側の多様な受容ぶりを把握するのを目的とする内容である。

1950 年代、中国政府がソ連に学ぶことを掲げて、多数の宣伝キャンペーンを展開した。これらの宣伝キャンペーンは建国初期のイデオロギー宣伝の支柱として、新生政権の基盤強化、社会主義優位性の樹立に絶大な効果を発揮したとされる。

先行研究は、こうした宣伝キャンペーンの規模の大きさと内容の多様さに目を奪われ、中国政府による強力な推進の結果、ソ連文化が中国社会を席卷したという捉え方をするのが一般的である。一方、民衆はキャンペーンの働きかける対象者であるにもかかわらず、彼らの受容が考察されていない。そのため、ソ連文化が当時の中国社会、人々の対外意識にいかなる影響を与えたか、との問いに対する答えが不完全のままであり、なぜソ連文化の影響が中国社会に広がったとされるにもかかわらず、中ソ対立の傾向を和らげることができなかつたのか。なぜソ連文化の影響が中ソ対立後、潮をひいたように中国社会から一気に消えることがなかつたのか、などの問題が残っている。

こうした問題を検討するにあたり、民衆側の受容ぶりの把握が肝心である。本報告は 1950 年代前半の中ソ友好交流に対して、上海の青年知識人がいかに受け止めたことを考察する。考察する際、欧米式の教育の影響を受けた上海の青年が、政府主導で入っているソ連文化の波に対して、違和感を覚えながら、いかに受け止めていたプロセスを考察のポイントに据える。

使用史料は上海地方政府の檔案、地方新聞と 1950 年代の青年知識人の日記類である。その中の日記類は中国の歴史研究者が近年精力的に発掘した資料であり、これを通して複数の文化のぶつかりに身を置かれた若者らの考え、心境をダイレクトにキャッチすることができ、独自の価値がある。これらの史料への考察を通して、国家権力主導の宣伝キャンペーンの嵐の中で、従来の欧米式教育という背景を持ちながら、急速に変わる社会的雰囲気という狭間の中、若い知識人の見方がいかに形成されていったのかを把握することを目的とする。